

主 題：放蕩息子のたとえ**聖書箇所：ルカの福音書15章1-3節、11-32節****命題：ひとりの罪人が悔い改めるなら天に喜びがある！**

きょう学んでいくルカの福音書15章は、聖書の中で最も愛されている箇所の一つで“福音の中の福音”とも呼ばれています。私も幼い頃から教会学校で何度もお話を聞いた箇所です。聖書をお持ちの方はルカの福音書15章をお開きください。

まずいつものように、この箇所の背景から見ていきます。どの聖書を学ぶときももちろんそうなのですが、特にこの“たとえ”を学ぶときは、だれが、だれに、何のために伝えるかを話すときに、“たとえ”が用いられています。ですから、話の背景がとても大切になってくるのです。この15章では、当時の宗教的なリーダーだったパリサイ人や律法学者たちの教えや考え方に対して、イエス様の反論が三つのたとえを通して語られています。パリサイ人、律法学者の教えや習慣、すなわち彼らの発する情報や行動はあたかも神のみこころであると捉えられ、それを聞く人々の心に、また生活に、広く深く影響を与えていました。パリサイ人らは「律法を守ることこそが最も大切である」と教え、守らない人のことを「地の民」と呼び、蔑んでいました。神様はモーセに律法を与え、罪の基準を人間に教えてくださいました。それを一言で言うなら、「神と人とを愛しなさい」というものです。「これを完全に守るならあなたは神からの祝福を得る」と約束されています。「完全に」というのは、「行いにおいても、心においても正しい」ということです。行動だけ、また儀式だけの見える部分だけではなく、その動機が最も大切だということです。しかし行いだけが表面化し、神様への愛を置き去りにしていたのが当時のパリサイ人、律法学者の真の姿でした。しかし、彼らは「私は律法を守っています！」と主張していたのです。確かに見た目は守っているように見えました。そして、この律法を守ることに失敗した人々を「地の民」（すなわち罪人）と呼び、彼らを断罪し、すべての生活において（それは結婚や仕事、またはともに食事をするに至るまで）彼らとの交流を一切断っていました。事実、それは社会からの追放のようなものでもありました。彼らは実に、「罪人がひとりでも神の御前で抹殺されるなら天に喜びがある」と考えていたほどだったのです。パリサイ人らは罪人を突き放し、彼らの滅びを求めています。

15：1-3に目を向けてください。ここに書かれているのは、そのパリサイ人とは違い、話を聞きたいと集まってくる罪人たちを心優しく迎え入れ、彼らをさとし、また食事などにも進んで参加されたイエス様の姿です。パリサイ人はこのイエス様の行動につまずきました。イエス様は多くの奇蹟を行い、聖書を大胆に語り、また律法も完全に守っておられました。パリサイ人や律法学者らはイエス様を、神の人なのだろうかと考えてもいましたが、やはり違うのではと思い始めるのです。2節に「この人は、罪人たちを受け入れて、食事までいっしょにする。」とあります。このイエス様は罪人に温かくまた優しく接しておられる、どうしてなのか？！このことが、自分たちの考えや習慣が絶対に正しいと思っていた彼らの強烈な不満となったのです。2節に「つぶやいてこう言った」と書かれています。この「つぶやい」ということばは二つのことばが合わさってできたものです。「あちらこちらに」ということばと、もう一つは「不平不満、文句」ということばです。「あちらこちらに不平不満、文句が沸き上がった」ということを表しています。イエス様のあらゆる行動に対し、彼らの中に不平不満があふれ出し続けた、これがきょうの話の背景です。

15章のイエス様の話は、イエス様の話を聞こうと集まって来た、当時虐げられていた罪人たちやイエス様の論敵であるパリサイ人や律法学者に向けて語られたものです。きょうはここに記されている三

つのとえ話（百匹の羊、なくした銀貨、放蕩息子）の中の「放蕩息子のたとえ」をともに学んでいきます。この三つのたとえすべてが教えてくれているのは一つの内容です。それは「ひとりの罪人が悔い改めるなら天に喜びがある！」これがきょうの命題です。それぞれのたとえが語られたのは、聞くすべての人が「神は罪を悔い改めて、神のもとに帰ってくることを望んでおられる」ということを確実に理解するためです。それまで「神のもとにあなたたちは帰れない。あなたたちは抹殺されて当然だ！」と言われていた罪人たちがこのイエス様の話を聞いて、どれほど慰められ、神様のもとに帰りたい！帰っても良いのだ！私も帰れるのだ！という思いになったことでしょうか。では、放蕩息子のたとえから四つのポイント見ていきたいと思えます。

ルカ 15 : 11 - 32 節

「:11 またこう話された。「ある人に息子がふたりあった。:12 弟が父に、『お父さん。私に財産の分け前を下さい』と言った。それで父は、身代をふたりに分けてやった。:13 それから、幾日もたたぬうちに、弟は、何もかもまとめて遠い国に旅立った。そして、そこで放蕩して湯水のように財産を使ってしまった。:14 何もかも使い果たしたあとで、その国に大ききんが起こり、彼は食べるにも困り始めた。:15 それで、その国のある人のもとに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって、豚の世話をさせた。:16 彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。:17 しかし、我に返ったとき彼は、こう言った。『父のところには、パンのあり余っている雇い人が大ぜいいるではないか。それなのに、私はここで、飢え死にしそうだ。:18 立って、父のところに行って、こう言おう。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。:19 もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。雇い人のひとりにしてください。』:20 こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。:21 息子は言った。『お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。もう私は、あなたの子と呼ばれる資格はありません。』:22 ところが父親は、しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。:23 そして肥えた子牛を引いて来てほふりなさい。食べて祝おうではないか。:24 この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。』そして彼らは祝宴を始めた。:25 ところで、兄息子は畑にいたが、帰って来て家に近づくと、音楽や踊りの音が聞こえて来た。:26 それで、しもべのひとりと呼んで、これはいったい何事かと尋ねると、:27 しもべは言った。『弟さんがお帰りになったのです。無事な姿をお迎えしたというので、お父さんが、肥えた子牛をほふらせなされたのです。』:28 すると、兄はおこって、家に入ろうともしなかった。それで、父が出て来て、いろいろなだめてみた。:29 しかし兄は父にこう言った。『ご覧なさい。長年の間、私はお父さんに仕え、戒めを破ったことは一度もありません。その私には、友だちと楽しめと言って、子山羊一匹下さったことがあります。:30 それなのに、遊女におぼれてあなたの身代を食いつぶして帰って来たこのあなたの息子のためには、肥えた子牛をほふらせなされたのですか。』:31 父は彼に言った。『子よ。おまえはいつも私といっしょにいる。私のものは、全部おまえのものだ。:32 だがおまえの弟は、死んでいたのが生き返って来たのだ。いなくなっていたのが見つかったのだから、楽しんで喜ぶのは当然ではないか。』」

1. 明らかな罪 11 - 13 節 <自我に生きる人の姿>

一つ目のポイントが11 - 13 節に記されています。それは、「明らかな罪」についてです。11 節から見ていくと、主な登場人物は父親と二人の息子であることがわかります。まずは弟にスポットライトが当てられています。ここに記されているのは言うまでもなく明らかに「罪」についてです。皆さんも酷い弟だと思ったことでしょうか。弟のこの無礼さ非情さはだれに対しですか？父親に対してです。この「弟」とは、いったいだれのことを表しているのでしょうか？それは、権威者である創造主に対して罪を犯しているすべての人間のことを表しています。では、「罪」とはいったい何でしょうか？パー

クレイは、ルカの福音書註解にこのように記しています。「罪とは、人生において神にその本来の位置を与えないことであり、神のものである権力を篡奪することである。」少し難しいことばですが「篡奪（さんだつ）」は、本来君主の地位の継承資格のない者が君主の地位を奪取すること、と辞書に載っていました。下克上やクーデターを思い起こさせることばです。人がそれを神に対してしている、それが罪です。本来神様が自分より上にあるべきなのに、神様よりも自分の位を高い位置に置くこと、創造主である神を認めないこと、また神として礼拝しないこと、また感謝もしないこと、神の命令を守らないこと、権威を認めないこと、そして従わないことは、すべて罪です。また神に与えていただいたもの、いのちや才能を神のためにではなく、自分のためだけに使うことも罪です。すなわち神が創造された本来の目的からの外した生き方、それが罪なのだ。このたとえの冒頭は、明らかに罪について記されています。詳しく見ていきます。

A. 弟の罪 12-13節

12-13節には、弟の罪について描写されています。弟はこう言っています。12節「お父さん、私に財産の分け前をください。あなたが死んだときに私がいただけるはずのお金を今、私に下さい。」そしてその後が続くのは「それを持って私は家を出て行きます。」と。13節に目を向けると「放蕩をし」ということが出てきます。お金を手にした彼はすぐに荷物をまとめて遠い国へ旅立って行きました。そこで成功してもっと稼いでやろうと思ったのかもしれませんが。しかし残念な結果が記されているのです。「そこで、放蕩して、湯水のように財産を使ってしまった」と。有名なこのたとえのタイトルになっていることば「放蕩」には「無駄にする」とか「浪費する」という意味があります。この「湯水のように」も「浪費する」「使い果たす」という同じような意味合いをもつことばです。彼は全財産を使い果たしてしまったのです。この弟息子が犯した罪とは何か？それは言うまでもなく、自分のやりたいことをしたいがために父親を亡き者と考えたこと、そして何よりも彼が父親を深い悲しみの淵に落としてしまったことです。モーセの十戒の五番目、申命記5：16には「あなたの父と母を敬え。あなたの神、【主】が命じられたとおりに。」と書かれています。「命じられたとおりに」というのは、神様は聖書を通してあらゆる箇所で、子どもが父の命令や願望、忠告に耳を傾けること、また必要を満たし（マルコ7：10-12）、その欠点を覆うこと（創世記9：23、箴言30：17）などを命じておられます。この弟息子が犯した罪は、父親を敬わなかっただけではありません。この律法をお与えになった神に対しても、彼は罪を犯しています。この命令に違反しているわけですからね。そして神の律法を犯した者に対しては、死をもって償わなければならない、と聖書に明記されています。ローマ6：23にはこう書かれています。「罪から来る報酬は死です。」必ずその結果与えられるものにこの「報酬」ということばを使います。罪を犯した者には必ず死が待っているということです。

ポイント1「明らかな罪」で教えられていることは、「罪とは神の存在（権力、支配、所有権など）を無視して、創られた目的から外れ、自分勝手に生きること」です。

では、私たちはどうでしょうか？——罪なんて人それぞれじゃないですか？私はこう思うけど、あなたはそう思う、それぞれでいいんじゃないですか？と思うかもしれません。またある人は、なんてひどい息子だ！私は父も母も大切にしているし、ましてや親が生きている間に財産が欲しいなんて思ったこともない、こんな弟のような人間でなくてほんとはよかった！と思うかもしれませんね。ここに描かれている「弟」というのは、神から離れ、自分勝手に生きているすべての人のことです。聖書は唯一真の創造主がおられ、私たちはその神に創られたものの一つであると教えています。創られた者には創ってくださった方に対しての責任があります。ローマ1：18-21にはこのように書かれています。「18というのは、不義をもって真理をはばんでいる人々のあらゆる不敬虔と不正に対して、神の怒りが天から啓示されているからです。：19 それゆえ、神について知られることは、彼らに明らかです。それは神が明らかにされたのです。：20 神の、目に見えない本性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造された時からこのかた、被

造物によって知られ、はっきりと認められるのであって、彼らに弁解の余地はないのです。:21 それゆえ、彼らは神を知っていながら、その神を神としてあがめず、感謝もせず、かえってその思いはむなしくなり、その無知な心は暗くなりました。」どうですか？罪の基準は人それぞれではありません。神に対してすべきこと、また、してはいけないこと、この神が仰せられることに対して、が罪の基準です。あなたは創造主である神様を認めない、また神様として礼拝しない、また感謝もしない、神様の命令を守らない、すなわち神の權威を認めない、そして従わない…そのようなことはないでしょうか？また、神様に与えて頂いたもの、いのち、才能などを神様のためではなく自分のためだけに使い、自分勝手な生き方をしていないでしょうか？神様を悲しませ、神様を怒らせる罪。人に永遠の死をもたらす罪。そんな罪について、私たちはいま一度真剣に考える必要があります。なぜなら、その結果は永遠の死、永遠のさばきだからです。弟息子は父親に逆らい、落胆させ、自分勝手に生きていました。自分に必要なものだけを手に入れ、父親の存在自体をも忘れ去ろうとしていました。もう一度言います。弟息子が表しているもの、それは創造主である神を無視して自分勝手に生きる人の姿です。私はかつてそのような者でした。あなたはどうでしょうか？

B. 罪の悲惨さ 14-16節

14-16節に描かれているのは「罪の悲惨さ」です。財産を使い果たした彼を待っていたのはあまりにも悲惨な生活でした。飢饉になり、食べる物もなくなり、彼はある人のもとに身を寄せました。この「身を寄せ」ということばは、「糊でくつつく」というようなことばです。「くつついて離れない、しがみつく、すがりつく」という意味です。泣きながらいのち乞いをするこの弟の姿が思い浮かぶでしょう。ここに出てくる「その人」は弟に「豚の世話をさせた」とあります。なぜ豚なのでしょう？このたとえを聞いていた当時の人たちにはすぐにそれが理解できました。なぜなら古代イスラエルの律法ではこう定められているからです。「豚を飼う者は呪われる」と。弟がすがりついたその人は、彼を神様の忌みきらう仕事に着かせ、彼を呪われた者にしました。だれに呪われるのか？もちろん、神様です。この世にある私たちが期待を寄せているもの、執着してしまいがちなもの、お金や名声、プライド…それらはますます神様から私たちを引き離してしまうものです。またそこにある満足は一時的なものでしかありません。この「世話をさせた」ということばは現在形で書かれています。つまり、その人は弟に豚の世話をさせ続けた、ということです。それも死ぬまでそうさせようとしたのです。続きにはこうありました。「彼は豚の食べるいなご豆で腹を満たしたいほどであったが、だれひとり彼に与えようとはしなかった。」と。弟はここで飢え死にしそうでしたが、食料はもちろん、豚の食べる飼料さえだれも食べさせてはくれなかったのです。その人にとっては、この弟のいのちは豚よりも軽かったということです。神から離れた人の人生はなんと惨めなことでしょうか。争いやねたみ、悪意でいっぱいです。そして何よりも罪の結果である永遠の死を待つのみです。この弟の生活は本当に惨めで悲惨なものでした。

しかし、こののろいと苦しみの中で、彼はやっと自分がすがりつく相手、糊のようにくつついて離れるべきではなかった人がだれであったのかに気付くのです。それが彼の中に現れた唯一の希望でした。この希望に気が付いた人はなんて幸いなのだらうと私は思います。もしこの弟が成功していたら、気付かぬまま永遠の滅びへと向かっていたのかもしれない。それはもっと恐ろしいことだと思いませんか？

2. 罪の悔い改め 17-20a節

二つ目のポイントは17-20節に書かれている「罪の悔い改め」です。まずこの「悔い改め」について少し学んでいきたいと思えます。「悔い改め」とは、自分中心の生き方から180度向きを変え、神様中心の生き方へと心の向きを変えることです。悔い改めは、心の変化、向きを表しています。F.F. ブルースはこの「悔い改め」ということばの意味について次のように説明しています。「悔い改め（ギリシャ語メタノイア、回心）には、罪から神に立ち返る、心の底からの後悔が含まれます。悔い改めた

罪人は神の赦しを受けるに相応しい状態にあるのです。」と。罪から神に立ち返る、心からの後悔が含まれる、その後悔は何を生み出すのか？それはつまり、心の変化である本当の悔い改めには神に向かう行動が伴う、ということです。この弟息子のことを詳しく見ていきましょう。そこには二つの悔い改めのステップを見ることができます。

悔い改めステップ1 罪を認め後悔すること

悔い改めのステップ1は「罪を認め後悔すること」です。17節見ると、「しかし、我に返ったとき」「我に」というのは「彼自身に」という意味があります。彼自身が本来いる場所ではないところに彼がいたことをここで示唆しています。そして「返った」は、「ある場所から別の場所に帰るまたは来る」という意味があります。今まで自分自身の姿を見失っていたことに気が付いたのだと。彼は自分自身の犯した罪にここで気が付いたのです。——私は自分勝手に生きることこそが幸せだと思っていた。しかしこの結果がこれだ。こんな場所で飢え死にしそうだ。家にいた時はどうだ、日雇いの雇い人でさえ食べるものにも困らずにいた。父は本当に誠実で愛に満ちた方だった。そんな父を私は裏切り、悲しませてしまった。まずは謝罪しよう。子と呼ばれる資格はもうないが、もしかしたら雇い人にはしてくれるかもしれない。もう一度父の傍で暮らしたい。そのように思ったことがわかります。弟の心の中に、罪の意識とともに後悔は渦巻き、謝罪の思いへと誘われています。18節に目を向けると、彼は「こう言おう。」と決意しています。「お父さん。私は天に対し罪を犯し、またあなたは前に罪を犯しました。…」」弟は神と自分との関係、また父と自分との関係を理解しました。その結果、神と父との前に罪を認め謝罪することを決意したのです。

悔い改めのステップ2 神に向かい行動に移すこと

次に悔い改めのステップ2は「神に向かい行動に移すこと」です。20節の前半に「こうして彼は立ち上がって、自分の父のもとに行った。」思うだけではなく行動に移すことが、その悔い改めが本当であったことを証明しています。なぜなら、悔い改めは心の変化であり、私たちの行動はすべて心に伴っているからです。

ポイント2「罪の悔い改め」で学んだことは「悔い改めとは心の向きを自分から神へと180度方向転換すること」です。

3. 慈愛の神 20b-24節

三つ目のポイントは20節の後半から24節に記されている「慈愛の神」についてです。ここで私たちは想像を遥かに超えるこの父親の愛を見ることができます。また同時に、神様がどれほど私たちを愛してくださっているのかも知ることができます。特に救いにあずかった人にとっては、この一節は大きな感動とともに神に対する感謝と申し訳なさを思い出させてくれるはずで、20節の後半をお読みします。「ところが、まだ家までは遠かったのに、父親は彼を見つけ、かわいそうに思い、走り寄って彼を抱き、口づけした。」なんと父親は息子が帰ってくるかどうかもわからないのに、また家から遠く離れているにもかかわらず、彼をずっと待っていました。あの子は帰ってくる、とずっと期待して待っていてくれたのです。そして「彼は息子を見つけるや否や、かわいそうに思い、走り寄って、口づけした。」と書かれています。その場で待っていることもできずに思わず走り寄って行ったと。この「かわいそうに思い」ということばは、「深い同情」また「あわれみを持つ」ということばです。このことばの語源は、「内臓」や「腸」という意味があります。そこから「かわいそうに思い」ということばに変わっていったのですが、心の奥底また中心部から湧き上がってくる深い同情心を表していることばです。「走り寄って」とあります。先ほども言いましたが、父親の方から走って迎えに行きました。そして次に出てきた「彼を抱き口づけした」を直訳すると「首を抱きかかえて何度も何度も口づけした」となります。ここでは、傷ついた息子に父親が倒れかかるように抱きつく様子が描写されています。勢いや感情そして喜びが伝わってきますね。それほどまでに父親は嬉しかったのです。私の息子が帰って来た！ずっと待ち望

んでいたこの日がついに来たのだ！と。そんな感動の再会の中、21節で、息子は愛情深い父親に甘えることなくみずからの決意を述べています。ここでも、悔い改めた彼の心を表しています。息子が父親に罪を犯したことは、紛れもない事実だからです。ところが次の22節では、父親の愛と赦しのあまりの大きさを知ることになります。このように父親は言っています。「…しもべたちに言った。『急いで一番良い着物を持って来て、この子に着せなさい。それから、手に指輪をはめさせ、足にくつをはかせなさい。…』」「急いで」は「直ちに」ということです。息子に恥を欠かせないようにするためとも理解することができますが、その瞬間にもう父親の中では、この息子は私の息子だということをすぐにでも表したいということが、この「急いで」ということばに込められています。そして、「一番良い着物」とは、文字通り「最高位のもの」「それ以外はない」という意味があります。父親のこれ以上はないという最高の喜びを表していることが「一番良い着物」ということばにも見て取れます。「手に指輪をはめさせ」指輪は古代においては「権威と威厳」を示すものとして用いられていました。新約においては「栄誉と地位」を表すものとなっています。父親はこの弟息子を本来の息子として扱い、彼の相続者として認めているということです！そして最後に出てきた「足にくつをはかせなさい」当時、奴隷はくつを持っていなかったばかりでなく、くつをはいていませんでした。このことから遠い国で彼は最終的に奴隷だったということがわかります。そこに父親が自由のしるしとしてのくつをはかせたわけです。父親は悔い改めたこの息子を再び自分の子として扱うことを宣言したのです。23節では、祝宴の命令を出しています。その祝宴で肥えた子牛を食べるということも、最も喜ばしいこと、最大のもてなし、そのことをとても喜んでいるということがここにも見て取れます——これほどまでに嬉しい日があるものか！きょうはなんてすばらしい日なのだろう！私にとって最高の日だ！みなも喜んでくれ！そんな気持ちが皆さんにも伝わると思います。ここまで見てきた父親の大きな喜び、その理由は何でしたか？それは罪を犯した息子が、その罪を悔い改めて自分のもとに帰って来たからでした。このことを父親は24節でこのように言っています。「この息子は、死んでいたのが生き返り、いなくなっていたのが見つかったのだから。」これが父親の最高の喜びの理由だったのです。父親が喜んだのは息子が帰って来たこと、そしてそれは前と同じ息子ではなかったということです。

この24節は最も大切な一節です。ですからもう少しだけこの節を掘り下げていきたいと思えます。この節を理解するために二つのフレーズがカギとなっています。

①一つ目は「死んでいたのが生き返」った、ということです。死んでいたのが生き返った・・確かに息子は死んでいた、ということです。「死んでいた」は未完形で書かれていて、「ずっと死んでいた」ということです。でもそれが今は生きています。父親の中では、彼はもう死んでいたのです。しかしその状態からいのちを取り戻したということです。これは私たちにも同じことが言えます。神様は完全に公正で聖なるお方だから、必ず罪をさばられます。見て見ぬふりはなさいません。罪からくる報酬は確実に死なのです。このままでは結果は決まっています。しかし神様は私たちが生きる方法、救われる方法を準備してくださいました。私たちの悔い改めを待っておられる、救いを切望しておられるということです。しかしそこには時限があります。いつまでにと決まっているのです。それは、私たちが生きています。私たちが生きています間に悔い改めて神に立ち返らなければいけないということです。

②二つ目のフレーズは「いなくなっていたのが見つかった」です。文字通り、この息子は父親のもとからいなくなっていました。しかしこのことばにはもっと深い意味があります。「いなくなっていた」これは「滅んでいた」とか「失う」また「死ぬ」という意味があります。完了形で描かれています。完全に滅んでいた、完全に失われていた、ということです。しかし、それが「見つかった」と。このことばは受け身で書かれていて「見つけられた」ということです。だれかが探し求めてくれなければ、もはやだれにも見つけることができなかつたのに、父親は息子を探して見つけ出したのです。父親の愛の深さ、大きさが伝わってくる表現ではないでしょうか。

私たちはこのことを聞くとすぐに、あるひとりの人物を思い出します。あるお方が私を探し求め、ご自身のいのちをも投げ捨てて救い出してくださったから、今の私がいます。きょうのテキストの少し後になる19:10にはこのように書かれています。「人の子は、失われた人を捜して救うために来たのです。」「人の子」とはだれのことでしょうか？私の罪を大きな愛で覆ってくださったお方がおられます。もちろんタダではありませんでした。あまりにも大きな犠牲のもとに、私は神のもとに帰ることができたのです。そしてそのことを何よりも喜んでくださっている！

私自身についてこう考えました。——これから私はどんな人生を歩んでいけばいいのだろう…神の家族として迎えられた私は、だれに喜ばれる人生を目指すべきなのだろうか…再び神から離れ、自分勝手に生きるべきだろうか…のろいに身を汚すべきだろうか…。私は、罪から離れ、神のために生き続けることができるよう願っています。いつも神の愛を覚え、その愛に応え生きていくことができるようにとそう願っています。私が神を愛したからではありません。神がまず私を愛してくださったから今の私がおり、そう生きたいと願うことができるようになりました。私たちは毎週コロサイ人への手紙を学んでいます、その1:10には「主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ」と書いてありましたね。きっとこの弟息子もそう思ったに違いありません。家を出る前の息子とは別人だったはずです。ポイント3「慈愛の神」で教えられたことは「神はあなたを愛してくださっている」ということです。

ここで、この話はクライマックスを迎えおしまいかと思いきや、次に兄息子が出てきます。背景にあった通り、この話は、罪人を糾弾し廃絶しようと考えていたパリサイ人、律法学者たちへの反論であるからです。兄息子を通して描かれているもの、それがパリサイ人、律法学者たちの姿です。

4. 隠れた罪 25-32節<いつわりの従順>

四つ目のポイントは「隠れた罪」について記されています。25-32節を見ていくと、とっても喜んでいて父親に対して、兄息子は明らかに怒っています。不平不満があふれ出しています。あんな弟に対して、あれほどに優しくして、あんなに喜んだりして…長年仕えてきた私に対しては何もしてくれなかったのに…。表面的に見ると彼の不満はなんとなく理解できるような気がしますね。父親のえこひいきでしょうか？そうではありません。この兄には隠れた心の罪があるのです。イエス様は弟息子の箇所を何と話されていたのでしょうか？それは「罪を悔い改めて神のもとへ帰ってきた罪人の姿、心の向きが自分中心から180度向きを変え、神へと立ち返ったことに対する神の喜びについて」でした。神は心を見ておられるのです。兄が描き出すのはパリサイ人、律法学者の心です。旧約聖書Iサムエル16:7節の後半にはこう書かれています。「…人はうわべを見るが、【主】は心を見る。」神様は心を見ておられます。兄息子は父親のあわれみの心に、また愛情に同意できませんでした。それは神のみこころに同意できなかったということです。パリサイ人、律法学者がよく知っていたと思われる旧約聖書のイザヤ55:6-7にはこう書かれています。「:6 **【主】を求めよ。お会いできる間に。近くにおられるうちに、呼び求めよ。:7 悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。【主】に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。」と。パリサイ人、律法学者らはこの神様のことばを拒否しています。そのように兄息子は父親とともに喜ぶことを拒みました。また彼は長年の間、仕え、戒めに従ってきたと主張していますが、その動機は何だったのでしょうか？父親に対する愛の心からだったのでしょうか？それとも義務的に、だったのでしょうか？もちろんここで表されているのは、後者の心を伴わない義務的な従順についてです。もし愛の心からの従順であったのなら、弟に対する愛、そして父親の気持ちに対する理解もあったでしょう。事実30節では、彼は弟のことを「私の弟」とは呼ばず、「あなたの息子」と呼んでいます。血の繋がりも認めないような、あいつと私とは関係ないというような、何とも冷たい表現だと思いませんか？そしてもう一つは、父親が兄息子に一切褒美を与えていないことです。父親は心を見ておられる神の姿です。その神が兄息子の行動を喜んでいなかったのです。これが決定的です。どうして兄息子は父親の気持ちがわからなかった**

のでしょうか？32節を見てください。最後に出てくる「当然ではないか」ということばに注目してください。これはいささかショッキングなフレーズです。「当然でしょ?!あなたにはこれがわからないの!」と。自分の気持ちと相手の気持ちの心の格差、隔たりがあまりに大きいことを表していることばです。神のみこころである「ひとりでも罪人が悔い改めるのなら天に喜びがある」ということが、パリサイ人や律法学者にとっては大いに不満だったからです。彼らはいつも神のそばにいて、いつでもみことばを学ぶことができ、みこころを知ることができたのに、またいつでも神様との交わりを持つことができたにもかかわらず、それをしませんでした。彼らの関心は神様よりも自分だったのです。この「当然ではないか」を逆に考えてみれば、神様は罪人が滅んでいくことを当然だと思っておられない、ということです。あなたの救いを願っておられる、ということです。そのこともしっかり覚えておきたいと思います。

ポイント4「隠れた罪」で教えられたのは、「偽りの従順はいらない。神は心を見ておられる」ということです。

ここを学んだときに、私自身も考えさせられることがありました。見た目は神に従順に見えるけれど、そこに心がともなっていない。彼らが忘れていたものがいったい何だったのか？これを考えることは、信仰者にとって日々の礼拝生活を吟味する上でとても重要なことです。礼拝や奉仕について、いつも動機は神様への愛の心だったかな？私の心の優先順位はいつも神様だったかな？と常に考える必要があります。私もうっかりしていると義務的になってしまうことが多々あります。何をするにもまず祈り、心を神様に傾ける、私やあなたの礼拝が、またご奉仕が、神様の前に良き香りとして立ち上りますように。そのことも皆さんといっしょに祈り続けていきたいことだと思っています。そして神様をまだ知らない皆さん、神様はあなたが悔い改めて、神に立ち返ることを何よりも望んでおられます。あなたの罪を赦す方法も、神のもとへと帰る道もすべて準備してくださっています。それはイエス・キリストの十字架の身代わりの死によってです。この主イエス様を信じる信仰によって、あなたの罪は赦されます。あなたがこの罪からの救いを受け入れてくださいますように心から願っています。